

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730567

研究課題名(和文) 精神病発症リスク状態における認知的洞察の検討：認知機能障害との関連を踏まえて

研究課題名(英文) Relationship between cognitive insight and attenuated delusional symptoms in individuals with at-risk mental state.

研究代表者

内田 知宏 (UCHIDA, Tomohiro)

東北大学・医学(系)研究科(研究院)・助手

研究者番号：30626875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、統合失調症および精神病の発症リスク状態であるARMS (At-Risk Mental State) を対象とした研究を行った。その中で、ARMSにおける認知的洞察の低下について、精神症状との関連を踏まえて検討していった。その結果、ARMSは健常者と比較して認知的洞察が低下していることを明らかになった。さらに、こうしたものの見方や考え方の硬さは、ARMSにおける妄想様の体験といった微弱な精神病性の症状とも関連していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Cognitive insight, defined as the ability to evaluate and correct one's own distorted beliefs and misinterpretations, is hypothesized to contribute to the development of psychotic symptoms. We investigated cognitive insight in individuals with at-risk mental state (ARMS), which is associated with a clinically high risk of psychosis. We also investigated the relationship between cognitive insight and attenuated delusional symptoms. The results showed that individuals with ARMS exhibited higher self-certainty than healthy controls, indicating impairments in cognitive insight in the former. More importantly, our results revealed that self-certainty was correlated with attenuated delusional symptoms. These findings indicate that overconfidence in one's own beliefs or judgments might be related to the formation and maintenance of attenuated delusions in individuals with ARMS.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：統合失調症 ARMS 認知的洞察

## 1. 研究開始当初の背景

近年、身体疾患と同様に精神疾患についても予防的観点から早期介入を実施する重要性が説かれている。近年の疫学調査 (Kessler et al., 2005) によると、成人前期に何らかの精神疾患に罹患している者のうち、そのおよそ 50% は 15 歳時までに、75% が 18 歳時までに、すでに何らかの精神科的診断がなされる状態になっていたことが明らかにされ、思春期や青年期の発達段階においてすでに顕著な精神症状やその兆候が出現している可能性が示唆されている。この思春期から青年期の発達期はその後の人生で必要となる社会関係能力や生活技能を習得する時期でもあるため、精神的な問題がその後の社会参加においてもさまざまな影響を及ぼすことが少なくない。そのため、若者の精神疾患を早期に発見し、適切な介入へと導く必要性が今日広く認識されつつある。その中で、統合失調症 (schizophrenia) をはじめとした精神病 (psychosis) の発症リスク状態を ARMS (At-Risk Mental State) として捉え、できるだけ早期に発見し、適切な介入を行うための取り組みが行われるようになってきている。統合失調症は、約 100 人に 1 人の割合で発症する高頻度の精神疾患である。その中で、とくに思春期・青年期は統合失調症の好発時期であり、その後の長期経過に大きな影響を及ぼすことも分かってきている。統合失調症を発症する前の時期には、抑うつ、不安、恐怖、引きこもり、不眠、被害的な考え、知覚異常など、他の精神疾患にも認められるような症状が出現することが多い。しかし、こうした症状を経験したとしてもその後には明らかかな統合失調症に至らない人たちも数多くおり、疾病としての特異性は乏しい。そのため介入の時宜を逸してしまうこともある。そこで、この時期に軽い妄想や幻覚といった症状を示し、近い将来に統合失調症を発症する危険性の高い状態を ARMS とし、その早期介入について模索されている。ARMS は、精神病を発症する前の時期 (前駆期) に該当し、主に軽い妄想や幻覚といった微弱な精神病性の症状によって特徴づけられている。

現在、ARMS に対する心理的介入の手段として最も広く用いられ、かつエビデンスの充実しているアプローチとして認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy) がある。認知行動療法では、「感情、行動の問題は出来事から直接生じるのではなく、出来事に対する解釈の仕方 (認知) を介して発生する」というモデルに基づいており、これを認知行動

理論という。統合失調症および精神病に対する認知行動療法では、仮説検証や、発見を導くことを通じて、患者に自身の思考を再考させていくことを手助けすることに焦点を当てる。その中で、「偏った考え方や誤った解釈を評価し、修正する能力」である認知的洞察 (Cognitive insight) が、妄想などの陽性症状の形成と維持に関連する重要な要因であると考えられている (Beck et al., 2004)。

認知的洞察はベック認知的洞察尺度 (Beck Cognitive Insight Scale ; BCIS) によって評価することができる。BCIS は、15 項目から成る自己記入式尺度である。回答者は、「0=全くそう思わない~3=完全にそう思う」の 4 段階評価を行う。BCIS は自己内省性 (Self-Reflectiveness) 尺度、および自己確信性 (Self-Certainty) 尺度の 2 つの下位尺度から成り立っている。自己内省性尺度は、自身のものの捉えかた、考え方について個人がどの程度、間違っているかもしれない信じ、それを認める自発性を持っているか、について査定する。自己確信性尺度は、個人が自身の決定と経験についてどの程度間違いなく正しいと信じているか、そしてそれに固執するか、について査定する。

認知的洞察は、統合失調症患者において低下していることが示されている (Beck et al., 2004) が、その発症群である ARMS においても認められる特徴なのかどうかは明らかになっていない。

## 2. 研究の目的

ARMS 群、健常群の 2 群間比較を行い、認知的洞察において ARMS 群で低下している領域を明らかにする。ARMS という概念が提唱されたことによって、統合失調症の発症前後の変化に焦点を当てた研究がここ数年で飛躍的に発展しつつある。統合失調症を顕在発症した群と比べて、アットリスク精神状態の患者が体験する精神症状は比較的軽度とされている (Yung et al., 1998)。こうした症候学上の違いによって、患者の認知や感情がどう変化するのかを検討することで、統合失調症の発症プロセスに対して認知行動理論からアプローチする足掛かりとなる。

ARMS 群を対象に、認知的洞察と精神症状との関連を明らかにする。近年では、認知の歪みの問題が、統合失調症の病態の中核である幻覚や妄想といった症状の形成や維持に大きな影響を与えていることが明らかにされている (Fowler et al., 2006)。とくに、統合失調症に苦しんでいる患者は、「自分は変わ

っている、おかしい」といったように自分自身について否定的に捉え、自尊感情が低いことがしばしばある。自己評価や自尊感情が低下することは、精神症状を悪化させるだけでなく、気分が落ち込み、自殺・自傷のリスクを高める危険性もある。また、他者に対して否定的な評価をすることもあり、こうした考えが「他人に追跡されている、だまされている、見張られている」といった被害妄想を派生させる要因のひとつと考えられている。認知行動療法において、こうした認知を把握し、症状との関係を理解していく取り組みはとても重要であるとされている。加えて、抑うつや不安などの感情的側面が2次的な精神症状を派生させることが知られており (Smith et al., 2006)、認知だけでなく、患者が抱く感情についても十分に考慮する必要性も示唆されている。

### 3. 研究の方法

健常者 200 名、および ARMS 患者 60 名に対して、認知的洞察尺度 (the Beck Cognitive Insight Scale : BCIS) を実施した。また、ARMS 患者に対しては精神症状を測定するため ARMS のための包括的評価 (the Comprehensive Assessment of At-Risk Mental States: CAARMS) も実施した。それぞれの対象者の特性については下表の通りである。患者の対象者については、東北大学病院精神科の外来通院者、病棟入院者から募集した。診断については、研究協力者である精神科医が担当した。

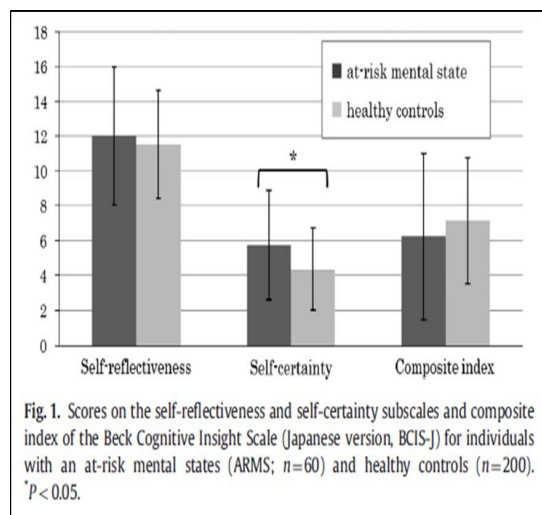
**Table 1**  
Demographic variables and scores on the Comprehensive Assessment of At-Risk Mental States (Japanese version, CAARMS-J) in participants with an at-risk mental state (ARMS; n=60) and healthy controls (n=200).

Characteristics	Mean (S.D.)		Statistics	P
	ARMS	Healthy controls		
Gender (number of males/females)	22/38	81/119	$\chi^2=0.28$	NS
Age (years)	19.48 (4.17)	20.34 (1.87)	t=1.55	NS
Education (years)	11.58 (2.25)			
GAF	47.63 (6.72)			
CAARMS-J				
Thought content	3.37 (1.25)			
Perceptual abnormalities	2.85 (1.44)			
Disorganized speech	1.67 (6.72)			

ARMS, At-risk mental state; GAF, the Global Assessment of Functioning; CAARMS-J, The Japanese version of the Comprehensive Assessment of At-Risk Mental States; S.D., standard deviation.

### 4. 研究成果

ARMS は健常者と比較して認知的洞察が低下していることを明らかになった。詳細は下図の通りである。



さらに、こうしたものの見方や考え方の硬さは、ARMS における妄想様の体験といった微弱な精神病性の症状ともしていることを明らかにした。具体的には認知的洞察の「自己確信性」と CAARMS における「微弱な妄想症状」の得点の間に相関が見られた。

本研究は、統合失調症の発症危険群である ARMS の患者を対象としている点が特徴的である。統合失調症の早期発見・早期介入についての実践的な活動は、1990 年代頃からオーストラリアを中心とした海外で徐々に始まり、ここ数年間にめざましい発展を遂げた。2004 年には世界保健機構 (World Health Organization; WHO) と国際早期精神病学会 (International Early Psychosis Association) が共同で早期精神病宣言を発表しており、国際的にも統合失調症に対する早期発見・早期介入の取り組みは急務の課題と考えられている。わが国でもこうした活動の必要性は指摘されているが、国際的な動向に対応した実践は一部にとどまり、この領域は海外から大きな遅れを取っていた。また本研究は、ARMS に対して認知行動理論からアプローチしている点できわめて独創性が高い。統合失調症に対する認知行動療法は 1990 年代からイギリスを中心とした海外で始まり、現在では心理的な介入の手段として最も広く用いられている。近年の世界認知行動療法学会でも、統合失調症に関するワークショップが開かれたり、関連シンポジウムが数多く行われたりしていたことから、統合失調症に対する有効な認知行動療法の開発と臨床実践は

今や世界的な潮流となっている。

以上の点について、本研究は、わが国における統合失調症の早期発見・早期介入に向けた先駆的な役割を果たすだけでなく、統合失調症に対する認知行動療法を発展させていく上でも意義があると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

1. Uchida T, Matsumoto K, Ito F, et al: Relationship between cognitive insight and attenuated delusional symptoms in individuals with at-risk mental state. *Psychiatry Research*, 217, 20-24, 2014. (査読有)  
doi:10.1016/j.psychres.2014.01.003

[学会発表](計2件)

1. 内田知宏, 松本和紀, 大室則幸, 桂雅宏, 濱家由美子, 砂川恵美, 前澤裕子, 石井優, 上埜高志, 松岡洋夫. 「At-Risk Mental Stateにおける認知機能障害と認知的洞察との関連」 第16回日本精神保健・予防学会学術集会、笹川記念会館(東京)、2012年12月15日-16日.
2. Ohmuro N, Matsumoto K, Katsura M, Sakuma A, Iizuka K, Kikuchi T, Obara C, Hamaie Y, Uchida T, Sunakawa E, Ito F, Matsuoka H. “Association of deficits in theory of mind and functioning in at-risk mental states and first-episode psychosis.” The 8th International Conference on Early Psychosis: From Neurobiology to Public Policy, San Francisco, USA, 11-13, October, 2012.
3. Katsura M, Matsumoto K, Uchida T, Ohmuro N, Kikuchi T, Obara C, Hamaie Y, Sunakawa E, Matsuoka H. “Negative schemata and positive symptoms in ARMS: Comparison with FEP using the brief Core Shema Scales.” The 8th International Conference on Early Psychosis: From Neurobiology to Public Policy, San Francisco, USA, 11-13, October, 2012.

4. Uchida T, Omuro N, Katsura M, Hamaie Y, Sunakawa E, Matsumoto K, Matsuoka H. “Cognitive insight and attenuated positive symptoms in At-Risk Mental State” The 3th Schizophrenia International Research Society Conference, Florence, Italy, 14-18, April, 2012.

[図書](計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

内田 知宏 (UCHIDA TOMOHIRO)  
東北大学・大学院医学系研究科・助手  
研究者番号: 30626875

(2)研究分担者

( )

研究者番号:

(3)連携研究者

( )

研究者番号: